

ふいふていーん

康一君

「ねえ、さかな先生って知ってる？」

一言だ。

こんなにもあっさりとした一言の問いかけで、現在室内に残っている三人という人数と比べると随分広い、がらんとした部屋に奇妙な空気が漂った。張り詰めたような緊張感と静寂が、やけに広い部屋に広がっていく。

「知らないはず、ないだろ」

問いかけられた少年は絞り出すような声で静寂を破ると、身に纏った制服に右手を伸ばして左の胸元を掴んでそのまま前に伸ばす。つけている校章が刻まれた小さな金属製のバッジを見せつけるような形だ。

「俺たちが……俺たち、この学園の生徒がさかな先生を知らないはずねえっ！ 忘れたとは言わせねえぞ、シュン！ テメエのせいできさかな先生はっ！」

「……はっ」

シュンと呼ばれた少年はほとんど叫びと変わらない返答を短い笑いで切り捨て、そうしてから、彼もまた制服の左胸に手を伸ばした。

「だからなんだよ、テツ」

からん——と。

乾いた音が、彼らのいる妙に広い部屋に響く。

——学園の象徴であり、さかな先生との繋がり の証である校章を投げ捨てた。

「テメエ……！」

鋭く刺すような視線をその身に受けながら、シュンは浮かべた笑みを崩すことなくブレザーを脱ぎ捨てて、ネクタイを緩める。

「屋上だ」

指の関節を鳴らしながら部屋を出て行くシュンに、テツは「言われるまでもねえ」と胸中で吐き捨てた。

どんなにいま現在人数の割に部屋が広かろうと、これからやることを考えれば、二人に対してあまりにも狭すぎるのだから——

たった一人部屋に残された少女・ナギサは微動だにせず、視線を手元のハードカバーに注いでいる。先ほどの騒動の最中においてすら、彼女は眉一つ動かすことなく行を追い続けていた。

「ぶひゃひゃひゃひゃひゃ！」

「ぎゃっはっはっはっはっはっ！」

だからこそ一分を待たずして、剣呑な雰囲気で行った二人の笑い声が廊下から響いてきても、やはり一切のリアクションは起こさない。

起こさないし、起こすまでも意味がない。

「おめーなんだよ、シユン。いまのいきなりよー！」

「テツこそなんだよ、俺のせいではさかな先生がってよ

ー！ 焦ったわ本気で！」

「ざっけんな、もともとおめーの無茶ぶりだろーが！」

「あんな展開で返ってくると思わねーだろ！」

「お前、ノリノリで校章投げてたじゃん！」

「あっそうだマジでお前、アレなくしたらまた購買じゃねーか探すぞクソマジでお前マジで」

「また写真撮影のときだけ後輩に借りりやいいじゃん」

「最近目つけられてるっぽくて、校門でめっちゃ止められるから無理」

「いやないわー、目つけられる生徒ないわー」

「お前毎日遅刻ギリだから、引き止められずに見逃されてるだけだからな」

「完全に遅刻したら、校門のとこ誰も立ってねーしな」

「もうお前の校章くれよ」

「いやないない」

などと軽口を叩きながら、二人は部屋に戻ってくる。

広い部屋広い部屋というか、ただの教室だ。そりゃあ普段四十生徒がいる教室なのだから、三人に対して狭いに決まっている。やけに狭いし、妙に狭いさ。なにもおかしいことはない。

「あったわ。クソソわかりやすいとこにあったわ」

「びびってふわっと投げたな、お前。リアリティ考えろ」

「バツカお前、アレくらいが逆にリアルなんだよ。あそこで校章オーバースローしたら嘘っぽいだろうが」

拾い上げた校章に息を吹きかけて埃を飛ばし、シユンは胸元に校章をつけ直そうとする。だがネジが上手く回らず、眉間にしわを寄せるハメになってしまう。

「なあ……もっかい演劇やってみねーか」

よく見て付け直そうと目を細めたシユンは、不意に浴びせられた一言に反射的に振り返る。視線の先では、いつの間にか窓際にいたテツがどこか遠くを眺めるような表情を浮かべていた。

「もう、いいじゃねーか。ありや事故だったんだよ」

「……かもな」

「さかな先生だってそう思ってるさ」

「……かも、な」

「さっきのお前じゃねーけど、さかな先生はずっと」

テツはシユンに話しかけながらも、その視線は外に向いたままだ。校舎の最上階である三階にいなから地上を見下ろすのではなく、さらに上へと目を凝らしている。飛行機よりも、雲よりも、空よりも、ずっと高いところ。

「……やめろ」

「お前の演技にはリアリティがあるって、本当にずっと」
「やめてくれっ！」

テツがなにを見ているのかわかるからこそ、シュンには声を荒げて部屋を飛び出すしかなかった。

部屋に残されたテツはしばし呆然としてから、歯を軋ませて追いかけるように部屋を飛び出す――

「ひいっ！ ひいっ！」

笑いを堪えきれないと言った様子で、腹に手を当てながらテツが部屋に戻ってくる。少し遅れて帰ってきたシュンは、額を右手で押さえてどこか悔しそうな表情だ。

『やめてくれ』って！ 『やめてくれ』って！

「おめーがそういう流れにするからだろおー！」

「そのまま捻りなしでよくやるわー！」

「捻る前に畳みかけてきたクセにこいつマジよおー！」

「はー！ いまのよかったわ、はー！」

一しきり笑い、思い出し笑いを三回ほど繰り返してから、ようやくテツは落ち着きを取り戻す。その頃には、シュンはもうずいぶんとふて腐れていた。

「悪かったよ、調子乗った。ごめんな、なっ」

「あんだけ笑われると傷つくわー」

「お前にセンスがあるからだよ、ほら演技にリアリ」

「はい反省ゼロー！ お前はそういうヤツだよ、はー」

「いやほんとマジで反省してます。なっ、そう思うよな？」
そんな風に唐突に話しかけたのは、彼ら以外に唯一部屋にいるナギサである。

「さっきのは調子乗ってたけど、実際シュンもおもしろかったし、傍から見てて仕方ないと思うよな？」

「………」

無言。

無言だ。

無言という字そのままに、ナギサからは言葉一つない。

「いやいや！ いまのはどう考えても、こいつが悪いって思うよな！」

「………」

やはり無言。

それもただ無言のではなく、手元のハードカバーを見据える眼球は上下している。

無視である。

視線も言葉もない。

「おーい聞こえてんのかー」

「きゃんゆうすびーくじゃばにー」

反応なし。

無言、無視、無反応で役三つだ。

せめて3900はほしいところだが、悲しいことにゼロにゼロをどれだけかけてもゼロだ。1000万パワー

を上回ることはできない。

さてどうしたものか。別にスルーはスルーでいいとして、この空気をどうしたものか。

そんなことをテツとシュンが口には出さず、それぞれ内心で考え始めたころだった。

「……やめてよ」

ナギサの小さい口から、か細い声が零れたのは。

「もうやめてよ、さかな先生の話すのは……」

零れ落ちたのは声だけではなかった。

半透明な縁で覆われたメガネの奥で、右の瞳からつうと一筋の涙が溢れ、頬を伝っていく。

「……………」

「……………」

今度は二人が無言になる番だった。無言だが無視ではなく、無反応でいるワケにもいかない。非常に言いづらなところだが、どうしても伝えねばならないことがある。

「ぞ、残念ながら……」

「ネタ被り……」

「は……！ わかってたけどは……！」

ナギサは思い切り手足を伸ばして、糸の切れた繰り人形のように頭から机へとたおれこむ崩れ落ちる。

「ないわ……！ 結構考えてたのに目の前で同じネタで滑るヤツないわ……！」

「俺が悪いのかよっ！」

「ていうかずっと考えてたのな」

「読んで内容とか頭入ってないからね。ページめくって視線動かしてただけだからマジで」

ハードカバーを枕にした状態で、ナギサは顔だけを上に上げる。眼球は真っ赤で、ブレザーの袖は見てわかるほどに濡れていた。

「こんな遊びで泣くかあ……？」

「私が一番思ってるよ！ 一番引いてるよ！」

「なんか俺、拗ねてたのはずかしくなるわ」

「私が一番はずかしいよ！」

「で、聞き逃したんだけど、さっきなんてボケたんだったけ？」

「死ぬ！」

「んんん？ こいつ死ねって言いやがったぜ、シュン」

「でも本当に死にたいのは？」

「私だよ！ 他にもない私だよ！」

枕代わりになっていたハードカバーを投げつけようとして、ナギサはどうにか思いとどまる。これで怪我人なんて出した日には、それこそどうしようもない。

「っていうかその本なんなの。ずっと読んでたけど」

テツの質問を受けて、ナギサははっと閃く。フリだ。間違いないフリだ。前フリだ。汚名返上のための舞台を用意してくれたに違いない。

「知らないのお？ さかな先生っていう作家の」

「………？」

「なに怪訝そうに首傾げてんだお前！」

ナギサが今度は思いとどまらずに投げつけたハードカバーはあっさりとキヤッチされ、「全然知らねーわ」と雑ナリアクションだけで返答された。

「帰ってればよかった。ほんと帰ってればよかった。アントタたちが教室出た少しの間に、こっそり帰ってればよかった」

「ん？ なんでなんで？ なんでえー？」

「はー殺したい。リアル殺したい。せめて殴りたい」

「まあでも、こつちも本気でお前にぶらなきやよかったと思ってるから、トントんっっちゃトントん」

「おっと？ 泣くぞ？ さらに泣くぞ？ おっと？」

「——いい加減にしろっ！」

会話に割って入るように声を張り上げたのは、シュンであった。これまでのやり取りが嘘のように、苦々しい表情を浮かべており、握った拳は力の入れすぎのためか微かに震えていた。

「こんなこと……こんなことしてる場合じゃねえだろ！俺だって現実逃避で乗っつかちまったけど、でもやつぱりおかしいだろうがっ！ こんなの……こんな、ふざけていいワケねえよっ！」

なにも言うことができずに俯くテツとナギサをよそに、シュンは呼吸を落ちつけてからはつきりと言いつ切る。

「俺たち二浪してて、センターまでもう一ヶ月ないんだぞ！」

これには、テツとナギサは俯いたまま沈黙を貫くしなかつた。

「教室は教室でも、ここは高校の教室ではない。

そう——高校の教室ではない。

高校の教室ではない、また別の教室だ。

「そう……ね。ちよつと現実から目を背けてたのかも。

反省しなきゃ」

「まだ三週間はあるんだし、な」

「お前ら……」

目頭を押さえるシュンに頬を緩めて、テツは気恥ずかしそうに付け加える。

「なんなら一年と三週間あるしな」

「下らねーこと言ってるんじゃねえ」

「ほんとだよ！ シヤレになってないよ！」

「ナギサは……二年と三週間あるし」

「シャレになってないって言ってるでしょ！」

がらっ——と。

勢いよく、教室の扉が響いた、

「カラー！ 残るのはいいけど、あんまり騒いじやダメ
つていつつも言ってるでしょー！」

「あっさかな先生」

「さかな先生じゃん」

「どしたのさかな先生」

扉を開けた彼女は返ってきた反応があまりに淡泊で呆
気に取りられるも、すぐにハツとしたように目を見開く。

「もー！ 私は若奈って言ってるでしょー！」

バタバタとその小さな身体を激しく動かしながら、顔
を真っ赤にして抗議する。

名前だけではなく、その動作が釣り上げられた魚のよ
うであるゆえのニツクネームだと、彼女自身は赴任して
から四ヶ月が経過してもまだ気付いていないでいる。

「なんでもいいけど、いまいいとこなんで……さかな先
生、ちよつと空気」

「三浪回避するために頑張るところだから」

「さかな先生来ると空気感が」

「な、な、な……！」

注意しに来たはずなのに注意されている現状に混乱し
かけてから、若奈はたっぷり重病ほどかけて再び平静を
取り戻す。

「三浪回避って、アナタたち中学生でしょー！」

痛いところを突いてやった——つもりだった。

つもりだった、のだが——

「うわー、言っちゃったよ」

「これはないわ……」

「私以上のやらかしが出るなんて……」

「ええ……だってアナタたち中三で、しかも中高一貫
だから受験なんて……したいならできるけど、先々週の
面接では……」

「しかも全部言っちゃったよ」

「さかな先生さあ、そんなことでいいの？」

「さかなに謝って」

「ええ……」

教室は教室でも、ここは高校の教室ではない。

そう——高校の教室ではない。

高校の教室ではない、また別の教室だ。

すなわち、中学校の教室である。

ぜいあーふいふていーんいやーずおーるど。

おしまい。